

【高校生の部】奨励賞

『海賊とよばれた男』(百田 尚樹/著)

青森県立青森高等学校 1年 小倉 匡敬

「日本を救う。」これは、この作品の主人公岡鐵造の志である。私の志はなんなのだろう。道の途中で立ち止まっていた私に力をくれたのがこの作品だ。

「自分の進みたい道を進みなさい。」いつも両親が声をかけてくれる。だが、「果たして自分の進みたい道を本当に進んでも良いのだろうか」と以前の私はよく悩んでいた。その悩みの最中に、自分の信じた道をどんなことがあっても突き進む主人公と出会った。人はそれぞれが不安を抱えて生きている。時には乗り越えられない壁にぶつかることもあるだろう。そんな時こそ、自分を信じてがむしゃらに進むことの大切さをこの作品は教えてくれた。読者の背中を押してくれる一冊である。

『また、同じ夢を見ていた』(住野 よる/著)

青森県立青森高等学校 1年 横山 心音

「幸せとは何か。」この本の主人公に課せられた問いを自分自身に問いかけてみても、すぐには答えを見つけられなかった。中学校3年間この本を何度読み返しても出なかった答えは、コロナウイルスによる休校中に出了。私にとって幸せとは、自分の大切な人が元気に笑っていることだ。家族や友人、好きな芸能人など、自分の好きな人たちが笑っているだけで心が満たされることに、15年間生きてきて初めて気づいた。その大切な誰かが、いつ自分の前からいなくなるかなんてわからない。私はこの本を読んで、1分1秒というこの瞬間さえ大事にしようと思った。きっとあと何十年と続く自分の人生の苦い部分も甘い部分も忘れることがないように。

『羊と鋼の森』(宮下 奈都/著)

青森県立青森西高等学校 1年 高坂 奈央

誰にだって、将来の夢について悩んだり、諦めようと思ったことがあるだろう。

私は、中学校の職場見学で病院を見学したことをきっかけに看護師という仕事に憧れ、なりたと思った。しかし、「こんな自分にできるのか」と何度も諦めそうになった。そんな時にこの本を読んだ。調律師を目指している双子の音楽人生を追っていく中で「ピアノを食べて生きていく」という表現が印象的だ。これは、これでもかというくらいの主人公の決意を表している感じがした。高校生の時期に夢が決まり、そこから成長していく主人公の努力や粘り強さ、それを支える周囲の人々の優しさが心に残る一冊だ。夢について悩みがちなこの時期にぜひ読んでほしい。

『夢を跳ぶ パラリンピック・アスリートの挑戦』(佐藤 真海/著)

青森県立青森西高等学校 2年 伊藤 源大

私には今、夢がある。しかし、同じ夢を追うライバルに圧倒的な実力差を見せられ、夢を追い続ける気力を失った。そのような時期にこの本と出会った。「神様はその人に乗り越えられない試練は与えない。」著者である佐藤真海さんが病気の告知を受け落ち込んでいた時に声をかけた真海さんの母の言葉だ。私はこの言葉が一番心に響いた。「いつかパラリンピックに出たい。」一度人生のどん底と言っていいほどの苦痛を味わった真海さんの強い思いは、自身の障害を乗り越える絶大な力となりパラリンピックという夢を叶えることができたのだ。「何があってもこの夢を叶えてやるんだ。」という真海さんの強い意志、精神力に励まされ、感動させられる一冊である。

『いなくなれ、群青』(河野 裕/著)

青森県立青森工業高等学校 1年 竹内 美唯菜

人は自らが成長する時に、邪魔になる性格を無くそうとする。自分も理性のある人間になるために、短気な性格を消す努力を続けている。大人になったら成長していない未熟だった頃の自分の存在など忘れてしまっているのだろうか。きっと成長した自分とは全く違う別人のようなものだろうと感じる。私はこの本と出会うまで、成長することは良いことだけだと感じていて、深く現実を考えることはなかった。現実、つまり、成長した自分は本当に正しいのだろうか。きっと間違いだらけなのだろうと感じた。多感で、繊細な心を持つ今だからこそ、自らの成長についてしっかりと考えたを持ち、現実についてを考えるきっかけとして、この本を薦めたいと思う。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』(ブレイディみかこ/著)

青森県立青森工業高等学校 1年 溝江 香波

みなさんは人間関係において大切にしていることはありますか。私は相手の気持ちを考えることです。でも、自分と全くちがう性格の人と関わるときに、相手の気持ちを考えるのは難しいですね。この本は貧困、いじめ、LGBTといった人間関係の中で起こる問題について、著者のブレイディみかこさんとその息子の体験談が書かれたノンフィクション作品です。私はこの本を読んで人との関わり方が変わりました。自分とは「ちがう」人に対して、態度を変えるのではなく、相手に感情移入する努力をすることが大切だと思いました。多様性はうんざりするほど面倒だけど、私たちの毎日をきっと豊かにしてくれます。一緒に多様性について考えてみませんか。

『カケラ』(湊 かなえ/著)

青森県立北斗高等学校 1年 田澤 野愛

この本には、容姿に対する価値観について深く書かれており、価値観は十人十色なのだ改めて強く感じました。正直、今の時代は自分の容姿に対する悩みをもっている人がとても多いと思っていて、私も悩みについて考えていたとき、この本を読んで容姿について視点を変え、見つめ直すきっかけになりました。この本は読み終わったとき、読んだ人の分だけ考えが生まれると思います。どんな考えが生まれても正解、不正解はないと私は考えています。そして、私は自分の容姿の嫌いなどところこそ好きになりたいという考えをもちました。あなたもぜひこの本を読んで、自分なりの考えを見つけて欲しいです。

『流星の絆』(東野 圭吾/著)

青森県立黒石高等学校 1年 阿保 はるね

私は小さい頃、祖父と庭でよく星を見た。楽しかったけれど、空を見上げると視界から祖父の姿が見えなくなり、どこかへ消えてしまうのではないかと不安になり手を繋いだ。

この本は両親を殺された三兄妹の絆を描いた物語である。たとえ命が消えても、家族と過ごした時間や、場所や、思い出が絆であり、大人になっても消えることはない。読み終えた後は、家族みんなに会いたくなる。

星を見たり、何かに夢中になることは素敵なことだが、それ以外のものが見えなくなる。私は家族の絆を、本当にわかっているのだろうか。困難を共に乗り越える力があるのだろうか。その答えが、この本の中にあると思う。

『とんび』(重松 清/著)

青森県立六戸高等学校 2年 小山田 和叶

あなたには愛する家族がいますか。この物語は母の突然の死によって幸せが打ち砕かれ悪戦苦闘しながらも、日々を強く生きようとする息子と父親の物語だ。父親の子供に対しての愛情を感じられる作品となっている。子供というのはすべてを理解しているようで、理解していない。親の優しさを時には、余計なものと感じてしまう私がいる。この作品に出会い、少しではあるが親に対する気持ちが変わった。どれだけ嫌なことがあっても、私には帰る場所がある。それを迎えてくれる家族もいる。当たり前のように感じていたが、その日常が幸せなのだと思い知らされる私が出た。そんな親の大切さを皆にも本を読むことで知って欲しい。感じて欲しい。

『モモ』(ミヒヤエル・エンデ/著 大島 かおり/訳)

青森県立三本木農業高等学校 3年 牟田 柊香

「時間」とは何か。この物語は時間どろぼうに盗まれた時間を取り戻そうと奮闘する少女モモの話です。

現代で生きる私たちは時間の本当の意味を忘れてしまいがちです。人間が人間らしく生きることを可能にする時間が失われつつあるのです。しかし、この物語の主人公モモは違いました。彼女は私に時間の豊かさ、美しさを教えてくれました。この物語を訳した大島かおりさんの「彼女は人に生きることを本当の意味を再び悟らせるためにこの世に送られてきた」という言葉に私も深く共感します。

モモは現代の私たちの心に寄り添い、生きるうえで最も大切なことを、言葉で、行動で、思いで私たちに訴えかけてくれるでしょう。